

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節

聖霊に生く

――イザヤ書第1、6、11、42、43、59、61、63章他――

1978年5月14日

小池辰雄

霊火 火で罪が清められた 私の宗教的な出会い 祈り込みは乗り込み クリストフォロス
我なんじを贖えり わがたつる契約 御霊の深い愛 聖霊を受けた体験 聞こえざる御霊の風
私と一体一如だ 我が哀なるキリスト

【イザヤ1】

6 足のうらより頭^{かしら}にいたるまで全きところなく、ただ創^{きず}痕と打傷^{うちきず}と腫物との
みなり。

【イザヤ6】

1 ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座^{みくら}にエホバの坐し給うを見し
に、その衣裾^{もすそ}は殿にみちたり。2 セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼
あり、その二つをもて面^{おも}をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つを
もて飛翔^{とびかけ}り。3 たがいに呼びいいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、
万軍のエホバその栄光は全地にみつ。4 かくよばわる者の声によりて闕^{しきみ}のも
とい揺りうごき家のうちに煙みちたり。このとき我いえり、禍いなるかな我
ほろびなん、5 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者
なるに、わが眼はばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。

6 ここにかのセラピムのひとり鉗^{ひばし}をもて壇の上よりとりたる熱炭^{あかきひ}を手にと
ずさえて我にとびきたり、7 わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじ
の唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたり
と。8 我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん、誰かわれらの
ために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此^{こゝ}にあり我をつかわした
まえ。

【イザヤ11】

1 エツサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすば
ん。……4 正義をもて貧しき者をさばき、その口唇^{くちびる}の氣息^{いきぎ}をもて悪人^{あしきもの}をころ
すべし。5 義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。6 おおかみ
は小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、……



【イザヤ42】

1 わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。……13 エホバ勇士のごとく出たもう。また戦士のごとく熱心をおこし、声をあげてよばわり大能をあらわして仇をせめ給わん。

【イザヤ43】

1 ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此い給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有なり。2 なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中をゆくとき焚るることなく火焰もまた燃えつかじ。

【イザヤ59】

21 エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。

【イザヤ61】

1 主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ、2 エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、3 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえ、歡喜のあぶらを予え、うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。

【イザヤ63】

9 かれらの艱難のときはエホバもなやみ給いて、その面前の使をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫によりて彼等をあがない、彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまえり。

10 然るにかれらは悖りてその聖霊をうれえしめたる故に、エホバ翻然かれらの仇となりて自らこれを攻めたまえり。11 爰にその民にしえのモーセの日をおもいいでて曰けるは、かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。彼等のなかに聖霊をおきしものは何処にありや。……14 谷にくだる家畜の如くにエホバの霊かれらをいこわせ給えり。主よなんじは斯おのれの民をみちびきて栄光の名をつくり給えり。



【使徒行伝2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処^{ひとところ}に集い居りしに、² 烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわか^{たち}に天より起こりて、その坐する所の家に満ち、³ また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。⁴ 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣^のべしむるままに異邦^{ことくに}の言にて語りはじむ。……¹⁶ これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。¹⁷ 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女^{むすこむすめ}は預言し、汝らの若者は幻影^{まぼろし}を見、なんじらの老人は夢を見るべし。¹⁸ その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。¹⁹ われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の氣とあるべし。云々

● 霊火

旧約聖書の特に聖霊のことで一番著しいところは、なんといつてもイザヤ書です。イザヤ書から少し学びながらいきます。イザヤ書6章。

1 ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座^{みくら}にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾^{もすそ}は殿にみちたり。² セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面^{おも}をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔^{とびかけ}り。³ たがいに呼びいいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。⁴ かくよばわる者の声によりて闕^{しきみ}のものと揺りうごき家のうちに煙みちたり。このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん、⁵ 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼はばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。

⁶ ここにかのセラピムのひとり鉗^{ひばし}をもて壇の上よりとりたる熱炭^{あかきひ}を手になずさえて我にとびきたり、⁷ わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと。⁸ 我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん、誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此^{こゝ}にあり我をつかわしたまえ。

イザヤの召命の場です。非常に霊的な異象です。だいたいこれは紀元前8世紀の中頃です。その時に火焰天使が、

「聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ」

と。旧約で文書預言者という――アモスからずっとですが――この預言者たちは考えてもを書いたのではない。みんな神の声を聞いて、祈りのうちにこれを書かしめられた。だから、預言者にとっては、神の言は全く霊言^{れいごん}なんです。霊と言とは一つ。特に預言者はそ



うです。

預言者がこの神の霊に触れるときにはみな単独であった。単独者です。イエス・キリスト自身もそうです。

この聖書の次元はなんといっても霊の次元なんです。神の霊の次元です。さつき歌った聖歌の中に、「火を待つわれに」というような言葉があった。この「火」というのは火であると同時に霊である。両方とも「ひ」と読む。受霊^{うけひ}という。

「聖霊と火でバプテスマをする」

とあるのは、もちろん聖霊と火は一つだからああいう言い方をして、二つのものではない。自然現象の火ではない。霊火^{れいひ}なんです。

モーセが召命を受けたとき（出エジプト記3章）、柴が燃えていた。あれも霊火です。聖なる神、この神の聖というのは熱い。冷たいのではない。聖さ^{きよ}というと、なにか少し澄んだ冷たさをへたすると思いますが、そうではない。霊と火、霊火、太陽のような――まあ私たちが自然現象で見るのは、太陽が最も素晴らしい火ですが――その霊的な熱さを持ったもの。神の愛は、焼きつくすような愛なんです。燃え立たせてやまざるところの愛です。

●火で罪が清められた

この預言者イザヤが召命のときに――これはイザヤ書1章にも書いてある――イスラエルの民は、

「^{かしら}足のうらより頭にいたるまで全きところなく、ただ創痕^{きず}と打傷^{うちきず}と腫物との

みなり。」（イザヤ1:6）

と。イスラエルの民はダメだ、神さまに悖^{もと}つていと。頑^{かたく}なである。その中の一人として彼は民の罪を同じく自分で感じている。そして、

「禍^{わざ}いなるかな、われ滅びなん」

と。このままでは自分はまだ滅びる。汚れたる民の一人であると。正直、自分をさらけだして告白したわけです。

聖霊が臨む前には贖罪^{あがなひ}のことがある。贖罪なくして聖霊は来ない。その極まったのがキリストの十字架です。旧約ですからここには十字架はない。けれども、イザヤ書でほとんど十字架的なのはイザヤ書53章です。水で清めるのではなくて、火で焼いてしまうという。これは強いんだ。バプテスマは水にひたす。今度は火にひたすんだ、霊火の中に。

イザヤ書には「唇、口」という言葉がときどき出てきます。セラビムが霊的な火をもつて彼の唇に触れて、これを焼いたという。罪は除かれたと。もちろんこれは徴です。霊的な徴なんだ。「口は災いのもと」というけれども。人間の口は、しかし、口の奥は心ですから。口を焼かれたことは実は心を焼かれたこと。心ほど恐ろしいものはない。

「万軍のエホバよ、汝^{みづか}わが心腸を見たもうものよ」



とエレミヤが言っている。エレミヤは心の預言者ですから。原子爆弾や水素爆弾が恐いのではない。人間の心が恐ろしい。それはサタンの虜^{とりこ}になるから。

火で焼かれた。即ち、罪が清められた、罪が贖われたという、旧約的な徴です。イザヤ書6章において、預言者イザヤがはつきりとその霊的体験をさせられた。そして神の声がきたときに、

「われ此^{こゝ}にあり我をつかわしたまえ。われここにあり。」

と。「われ此にあり」というのは

「はいっ」

ということ。「どうぞお遣わしてください」と、今度は提身しているわけです。提身するといふことは、僕となるということ。エホバの僕となる。僕となるということはただじつとしていることではない。提身することなんです。全存在を献げて、

「どうぞ、お使いください」

と言うのが僕の姿です。平伏すというけれども、ただ平伏しているのではない。平伏して、「どうぞ、お使いください」と積極的に前向きの姿勢であるのが僕ということ。

イザヤ書6章は、そういう意味において、聖霊降臨の旧約的なすがたです。罪の贖いということが先行するということを忘れてはいかん。キリストも直接には霊を下したまわなかった。

「わが受くべきバプテスマあり」

と。即ち、

「十字架を通ってからお前たちに霊を注ぐから、待っている」

と。彼らは本当に心を一つにして祈り待っていました。そうしたら、使徒行伝2章のようになことになった。

●私の宗教的な出会い

内村先生や藤井先生が願っておられたことを、その突破をしたのが手島君と私なんです。『教育事報』という雑誌に「私の宗教的な出会い」という文章を書いた。その一部分をちよつと読みます。

「一九三〇年の春、内村先生が召天。夏にはそのあとを追うがごとく藤井先生も召天。日本は二大人物を失った。その後、内村先生の同じく高弟塚本先生（イエス伝研究の最高権威者）の丸の内における集会に数年列席した。……内村・藤井・塚本の三先生に相前後して十数年間師事したことを生涯感謝しきれない。……」

一九四〇年九月二日、長兄小池政美の命日を期して私もささやかな独立の聖書集会を開いた。福音をもってするいわば舎兄の弔い合戦の火蓋を切ったのである。とにかく一回一回を真剣にやってきた。私が書いていた旧約聖書の詩篇の訳と解説に共鳴し



ていた手島郁郎氏と一九五〇年の晩秋に大阿蘇のふところなる垂玉温泉で深い祈りの集会を開いた。この集会は手島兄にとつても私にとつても天来の聖霊をもつてするペンテコステとなった。舎兄政美、内村、藤井、塚本の三先生との出会いはそれぞれのつぴきならない意味と内容を持ったものであった。神は不思議な準備期間をもつて段階的に魂の育成をしてくださった。ついに時が満ちて、手島郁郎氏との出会いをとおして直接にキリストの霊、霊なるキリスト、聖霊との出会いを与えてくださった。いな、それは出会いという表現では言い切れない。突破突入である。聖霊のバプテスマである。聖霊降臨によってキリスト教史が始まったように、私自身の信仰史もこの大阿蘇における聖霊降臨をもつて本段階に入った。

その後、私はもう一、二回、深い祈りで自分でもうひとつ深い体験をしますけれども。キリスト直結の信仰の現実に入った。大阿蘇における聖霊との出会いは決定的な霊的事実である。それ以来、私は無教会でもカトリックでもプロテスタントでもない。キリストの直弟子たちと同質の信仰的次元を限りなく追求して生きることになった。この破れ器をとおして多くの男女が霊肉ともに救われてきた。キリストの本願の効力が働くので、キリストの本願に助けられ、「南無キリスト」という称名のもと、十字架・聖霊における一如の現実を私は生きるのみである。キリスト教との出会いはこのようにしてキリストとの出会いを受けて、はじめて実を結びつつある。」

「出会い」ということで書いてくれと言われたもので、腹藏なく書いた。実は、これを別に誰にも見せたわけではないけれども、天野貞祐先生がどこからこの雑誌をもらわれて読まれて、そして昨日、私が校長室で会議をしているときに天野先生から電話がかかってきた。天野先生は、

「君のこれを読んだ。私は初めて本当の小池君を知った」

と、それであとは言葉がつまってしまつてね、涙になった。私はなんとも恐縮してうかがった。あとからそのお嬢さんがいろいろ説明しておられました。そういうことで、天野先生がその意味において――私はどうでもいい――この聖霊の事態がどういうことであるかを知ってください、非常に私は感謝でありました。

何といつても、聖書は神の霊の世界ですから、空気を呼吸するように、魂が霊気を呼吸するようになるならなければ、パウロが言っているとおり、キリスト者とはいえない。レッテル・クリスチャンが非常に多いわけです。我々は本当に御霊の人ならば、またそのように――どうせ人間ですから、みんな欠陥があります――しかし、躓いても転んでも、本当に前進せざるを得ない。悪魔とはキリストにあつて戦わざるをえない。もう日本はその他に救いはない。皆さんは、本当に一人でも立てるんです。この聖霊がくれば、恐いものはない。どうぞ、それをいよいよ体験していただきたい。



● 祈り込みは乗り込み

イザヤ書をもう少しききます。

「⁶足のうらより頭^{かしら}にいたるまで全きところなく、ただ創^{きず}痕と打傷^{うちきず}と腫物^{しゅぶつ}とのみなり。」(イザヤ1:6)

エホバをおそれることが歓びであるという。神さまの前に本当に平伏すときに歓喜がくる。それはキリストが本当に神さまに平伏してバプテスマを受けたときに、

「われ汝を喜ぶ」

という声がきたでしょ。喜びは上からきているんです。いわゆる人間的な喜びとちがう。

「⁴正義をもて貧しき者をさばき、

これは「正義」と訳すのではなく、「義」です。

公平をもて国のうちの卑しき者のために断^{さだめ}定をなし、その口の杖をもて国をうち、

ここにも「口」と書いてある。

その口唇^{くちびる}の氣息^{いぶき}をもて悪人^{あしきもの}をころすべし。

これは神の口になってしまう。「口唇^{くちびる}の氣息^{いぶき}」は靈氣です。御霊の息吹でサタンを倒すことはテサロニケ書にも書いてある。

⁵義はその腰の帯となり、忠信はその身のおびとならん。

「忠信」は「エメツ」という「アーメン」という字です。義だとか信だとかいう。

⁶おおかみは小羊とともにやどり、豹は小山羊とともにふし、云々」(イザヤ11:1-6)

と、もう非常に終末的な黙示録的な天界、楽園のことが、とうてい考えられないようなことが書いてある。

預言者という人たちは、神さまの霊に本当に捕らえられてしまっている。エレミヤも、

「エホバの言が骨のうちに燃えるがごとくで、黙^{もだ}そうと思っても黙することができない」

と言っている。全部これは祈りこんでいるからです、彼らは。神の中に祈りこんでいるから。

祈りがただお願いではダメですよ、皆さん。祈り込みでなければ。自分自身を神さまの中に乗り込まなくてはいいかん。祈り込みは乗り込むのと同じなんだ。これも提身です。もうその気合が――気合というか呼吸というか――電車の中でもどこでも私はできるんです、その祈りこみが。ということは、私は自分自身が問題でないからです。自分を何とも思っていない。こんなものを何と見たつてしようがないではないですか。だから、ありがたくてしょうがない。キリストがやってくるから。

「禪」の意義はあるでしょう。しかし、私は、あの「無念の冥想」とかいうのはすこし気



の毒に思う。あるがままでいいではないですか。なぜ、なにか澄まさなくてはいいんですか。
「あるがままを贖い主キリストの中に投げ入れること」
こんなありがたいことはないではないですか。その点では何といっても、法然、親鸞の角度が私はやっぱり本ものだと思うね。

「本来、仏性あり」

ということを自覚する禅宗的なその気持もよくわかりますよ。本来、仏性あるところに自分をいよいよ澄まして入れていこうという。ほかは邪念である、妄想であるといって、邪念妄想を外していこうという、ひとつの修行だね、あれは。

本来仏性があるならば、本来仏性であるところの一番根源的なものに、なぜ自分を投げ入れることがわるいか。そういうように対象化しているのではない。向うが主体なんです。本来仏性があるといったって、我々はみな恩恵によってできている存在です。その根源に――根源をどう解釈しようがいいですよ――その根源に自分を投げ入れて、本来の仏性の中に入るというのならば、それはやはり

「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」

のほうが私はもうひとつ本筋ではないかと思っている。えらく禅がはやっていっているけれども。もの凄く能動的なものが本当の受身から出てくるんです。とり澄ました聖ではない。

このイザヤに現れてきたところの豊かな、

「知恵聡明の霊、また力の霊、知識の霊、エホバを畏るるの霊」

というような実体。これはもちろんキリストの預言です。預言者は知りませんよ、そんなものがあるかどうかは。しかし、こういうように言わされてしまっている、示されてしまっている。これが、

「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。」

という不思議な言がこの預言をもつて言われているわけです。

● クリストフォロス

イザヤ書42章。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。」（イザヤ42・1）

これもエホバの僕の最初の歌です。キリストはこれを愛読されたに相違ない。そして、これは自分を預言している。

「聖書は我につきて証しするなり」

というのがそのことです。神さまの前に平伏して提身する。そこには神さまは喜んでこれに力を与える。霊をもつて力を与える。霊は戦う力であるとともに、その戦いは相手をみんな救い上げてしまう戦いです。



「クリストフォロス」という伝説がある。少年を背負って川を渡っていたら、だんだんその少年が重くなってきた。このクリストフォロスはもの凄い力持ちなんだけれども――「クリストフォロス」というのはギリシア語では「キリストを担うもの」という意味です――少年が重くなるけれども、いよいよ力が出てくる。というのは、その少年はキリストであつたという物語なんです。キリストが力をいよいよ与えてくれた。担えば担うほど力がやってくるという。これがこの聖霊の力なんです。どのような課題がきても、よききたということになる。もう今二十代の青年諸君がこの世界に入ったら、えらいことになるから。ドイツ語であろうと何であろうと、どしどしできるようになってしまふよ。

そういうようにして、僕とせられ、選ばれたる者は、人を救う使命を担っているから選ばれるんです。皆さんは一人びとり救う使命を担っている。担いというのは、寝たつきりの人でも、祈りをもって人を担っている。祈りは最大の力だから。祈りはキリストの本願のかかっている祈り。キリストの本願がかかっている祈りというのは御霊の祈りですよ。御霊にある祈り。キリストの祈りがいつもそうではないですか。

「汝の御意を成させたまえ」

というのは、

「汝の本願をなさしてください。本願を成就してください」

ということ。「御意」なんてもうようそう。「本願」のほうがいい。御意だっていいよ。

「神さま、あなたの本願をどうぞ、天に成るがごとく地にも成らしてください」

と、提身しているのでしょ。そういう祈り自身がもう、聖霊でなければ、聖霊の現場でなければ祈れない。そういうように本当に提身して祈ってごらん。御霊がくるから。ちつとも難しくない。

「御霊とは何でしょうか？」

なんて、時計を見るように、「御霊とは何でしょうか」というわけにはいかない。見えないもの、捕まえることのできないものが最も凄い實在なんです。対象化することのできないものが一番本ものです。

皆さんの心臓が一番本当の時計なんだよ、あなたの方の心臓が。時々、速くなったり遅くなったりするかもしれないが、これは止まらない。止まったら、地上でお終いだ。こういう腕時計は毎日巻かなければならないけれども。

なんか嬉しくてしょうがないんですか。どうですか、福音の世界は。

「今まで何か問題をいろいろ考えていましたけれども、みんなすつ飛んでしまいました」

と。問題なんか、どうせ死ぬまで、次から次へとやってきます。問題に囚われていたらダメですよ。すべからず問題に超越すべし。もうひとつ別な絶対次元に入っていかなくては。そうしたら、問題なんかは適当に神さまがいいようにしてくださいよ。



若い人は、結婚問題だ、やれ就職問題だと。どうにでもなりやがれと思ってやってくださいよ。今の人は相対的なことをすぐ勘定する。それがまた大体的経済問題だよな、春闘だ何だかんだと。日本はこんなこととしていたらもうどうなることやら。

成績がどうかとか。学校なんか落第して出てしまえ、面倒くさいから。それくらいの魂になってください。中退したやつにえらいのがたくさんいるよ。武蔵野の亀井勝一郎なんてのは中退してしまった。漱石だって数学で落第点とった。吉川英治なんて学校へ行きはしない。日本はあまり規格版すぎますよ。もつともの凄い文部大臣が出てきて大胆な改革しなければダメだよな、こんなこととしてゴタゴタゴタゴタしては。

「私はもう学校は止めた。しかし、私はもう聖書一貫でいくぞ」

というような青年が一人現れるといいね。それで本当に聖霊の人になってみる。凄いことが起きるから。

いいですか、御霊の世界はケチ臭い魂にはなれないですから、本当に棄身の魂でなければ。御霊は誰でもが、皆さんが無条件に入れる世界なんです。条件が付いているものは最高のものではない。絶対無条件なものが最深最高のものです。空気がそうだと言ったでしょ。空気は誰でも無条件にそれを吸っています。いくら断食しても、空気がなかったら参ってしまうよ。水のない断食もあるさ。けれども、空気のない断食はありはしない。それほど無条件なるものが空気で、無条件なるものはキリストの霊なんです。このキリストの霊をいただかないで、クリスチャンの、ヘッタクレのとあるかと。

「¹³エホバ勇士のごとく出たもう。また戦士のごとく熱心をおこし、声をあげてよばわり大能をあらわして仇をせめ給わん。」(イザヤ42・13)

なんて、勇ましいことが42章13節に書いてある。キリストはそのような勇者として、

「我既に世に勝てり」

と、サタンにうち勝ってしまった。これは神の霊がキリストにあつて勝った。無者キリストは無限無量者でありましたから。

●我なんじを贖えり

それで、聖霊の事態の前提として非常に大事な言葉がここにある。イザヤ書43章1節。

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う。イスラエルよ汝を^くくれるもの今かく言給う。

「ヤコブよ、イスラエルよ」と、これは民族に言っているんだけど、君たち一人びとりに「誰々よ」と名を呼んでいる。

おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有^{もの}なり。

²なんじ水中^{みづのなか}をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中^{ひのなか}をゆくとき焚^{やか}るることなく火焰^{ほのお}もまた燃え



つかじ。」(イザヤ43・1〜2)

と。イザヤ書43章の始めの数節は凄い。

「おそるるなかれ我なんじを贖った」

と、キリストは私たちに仰る。

ペンテコステを迎えるにはどうしても、もういつペンキリストの十字架を本当に受けとらなければダメなんです。私は贖われた者である。キリストの十字架の贖罪を完全に受けて、我そのものが贖いとられて、問題の中にありながらもはや問題を超越したものになっている。罪びとでありながら、罪びとでない。無条件にそういう恩寵の中に入っている。本当にその恩寵を、あなた方は冥想してごらん。そこに聖霊はもう来ざるを得ない。

「そうでしたか、主さま!」

と言ったら、もうそこには聖霊が来てしまっている。この十字架の贖いの恩寵を受けたその場において。

「お前の名をこんなに呼んでいるではないか。お前は私のものではないか。私はお前の中にいるではないか」

ということ。

「私はお前の中にいるではないか。お前は私の中にいるではないか」
というのは聖霊の内住の関係です。

深刻な恋愛をした人は、相手の中に自分がいるような気がしたでしょ。それは相手が今度男や女ではない。キリストなんです。神さまなんです。絶対次元の中にそれをアナログに入れてしまいなさい。恋人がどうであろうと、プラスであろうとマイナスであろうと、どうでもよくなってしまいうよ、今度は。そして、相手を本当に救うようになってしまふ。

旧約聖書の雅歌書というのはその角度から読まなければダメです。あれは凄い恋愛の歌だよ、雅歌書というのは。新婚を前提としたような歌だ。中世の神秘家たちが好きだった。というのは、キリストの中にそのように自分が入ってしまったという角度から読んでいるんです。セント・ベルナルなんているのはあれが非常に好きだった。

それで、もう何も恐いことがなくなってしまった。何も心配がなくなってしまった。何も疑うこともなくなってしまった。問題すらもなくなってしまった。有れども無しということ。

責任すらもなくなってしまった。無責任者。いわゆる無責任ではありませんよ、この無責任というのは。キリストが負ってくださる責任の中に入ってしまう。棟方志功が絵を書いたときにそう言ったでしょ。

「私は自分の絵に対して責任を持たない。書かせられてどうにもならん。自分の責任で、自分の意識で書いているのではない」

と。皆さんも、「せざるを得ない」という世界が無責任の本当に責任の世界なんです。「せざる



るを得ない」という世界です。御霊の力に、御言の力に押し出されて動かざるを得ない。

「聖書はドラマである」

と言うなら、御言はみんな――「御言、御言」とプロテストで言うけれども、意味の御言ではない――力を持っているんだ。

「わが言は霊なり、生命なり」

という、この力を持った聖書の言を直ちに力として受けとらざるを得ない。そうしたら動くよ。そのような生命力と行動力を持ったような会員になってください。

●わがたつる契約

私は旧約の話をしたらきりが無いけれども、もうちょっとやらせてもらおう。61章。このイザヤ書というのはたまらん。旧約聖書は重いから、イザヤ書だけを剥いで、ポケットに入れていつも読んでいればいい。

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、

どうしてこんな言葉が出てくるかと思う。エホバの御霊がやってきて、聖霊がやってきて、膏を注ぎ――「膏を注ぎ」というのは更に聖霊を注いでくださったこと――貧しきものに福音をのべ伝える。霊的にも肉的にも貧しき者に福音を、よろこびの音信をのべ伝える。よろこびの音信とはただ感情ではない。生命的に活かすこと。我々を活かしたもうところのキリストなんです。

「そうですか、キリストは生きていますか」

なんてではしうがない。私たちを活かしてくださっているキリストです。

我をつかわして心の傷める者をいやし、俘囚にゆるしをつげ縛められたるものに解放をつげ、

自由をつげる。心の痛みであろうと、肉体の癒しであろうと、自在である。霊肉渾然として救ってしまふ。ユダヤ人は、ギリシア人みたいに魂と体とを分けてはいませんから、体の中に虜になっっている魂とは思わない。魂も体もともに救ってしまふ。非常にそういうところは渾然一体的です。

2 エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告げしめ、又すべて哀むものをなぐさめ、3 灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、

「灰」というのは悲しみの象徴だから。

悲哀にかえ、歡喜のあぶらを予え、

歡喜のあぶらは歡喜の霊、福音の霊。

うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。」(イザヤ61・1



(3)

素晴らしいね、預言者というのは。これはみんな詩ですよ。ただ形容して言っているのではない。もうそういうように言わざるを得ない気持ちで言っている。キリスト以前に神の霊を受けた預言者たちというのは、そのような生き生きとした、本当に救わざるを得ないところの衝動が彼らの中にあった。62章もそうですよ。これはイスラエルと神さまとの関係を新郎新婦にたとえて書いている。

それから、イザヤ書59章21節。

「²¹エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、

「御霊」と「言」はここでもやつぱり同義語でしょ。聖書では「御霊」と「言」は分けることはできない。

今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔すえの口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。

と、御霊が。

わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。」(イザヤ59・21)

と。エレミヤへも契約がありました。心の中に記されたる契約がエレミヤ記31章に。けれども、私はこのイザヤ書の、第三イザヤのこの言はエレミヤをもうひとつ上回る言葉だと思っています。どういうわけだか、あまりこれを言わないんだ。「汝の上に置いた霊」、「汝の口に置いた言」は同じことです。新約になると今度は、「上」ではなくて、「中」だよ。

「汝の中に置いた」

と。そうすると、私たちの魂の中に置いた神さまの言。「口」はもうひとつ奥になる。

●御霊の深い愛

聖霊のバプテスマはどうしても、キリストの十字架を通らなければ、この聖霊のバプテスマにならない。けれども、イザヤにおいてはとにかくそれが「火をもって焼かれる」という事態をもって、その罪の贖いの徴が起きている。

63章の10節に、

「¹⁰然るにかれらは悖りてその聖霊をうれえしめたる故に、エホバ翻然ひるがえりかれらの仇あたとなりて自らこれを攻めたまえり。¹¹爰こゝにその民いにしえのモーセの日をおもいいでて曰けるは、かれらとその群の牧者とを海より携えあげし者はいずこにありや。彼等のなかに聖霊みたまをおきしものは何処にありや。

ここには「彼等のなかに」と書いてあるね。

……¹⁴谷にくだる家畜けだものの如くにエホバの霊みたまかれらをいこわせ給えり。主よな



んじは斯^{かく}おのれの民をみちびきて栄光の名をつくり給えり。」(イザヤ63・10)
14)

ここに、「聖霊」という言葉が三回出ている。そして、この御霊がいかに深い愛であるかということは9節に、

「9 かれらの艱難^{なやみ}のときはエホバもなやみ給いて、その面前^{みまえ}の使をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫^{あわれみ}によりて彼等をあがない、彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたまえり。」(イザヤ63・9)

と、深い愛の消息がたたみかけて書いてある。

「聖霊の別の名前は愛である」

と、トマス・アクイナスが言いました。「別の名前」というのは、「最初の名」という、あの言葉は「最初」という字です。愛は最初で終りです。力がある。本当の愛は霊的な力を持っている。でなければ、人を救うことはできない。担うこともできない。

その愛は、キリストの十字架ではつきり現れました。担いの愛が、贖いの愛が。

「今度は、愛の実質を与えるぞ」

というのがこの聖霊なんです。

●聖霊を受けた体験

それで、使徒行伝に行きます。

「われキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言いましたが、これは血の受洗だね。キリストと共に十字架せられた。使徒行伝2章。彼らは、命ぜられたように心を一つにしてひたすら祈りをつとめていた。十日間祈った。そして、五旬節の日に、

「1 五旬節の日となり、彼らみな一^{ひといつ}処に集い居りしに、² 烈しき風の吹ききたる³ とき響き、にわかに天より起こりて、

霊風が。まさに天津^{あまつ}風だ。

その坐する所の家に満ち、³ また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。」(使徒行伝2・1-3)

グレコの絵にそういうのがある。一人びとりの上に火が灯っている。では、

「今日はその霊風が起きないから、聖霊が来ないのか」

と。そうではないですよ。この2章では本当に特別な現象が起きた。
私は阿蘇^{あそ}の垂玉^{たるたま}温泉で手島君と凄い祈祷会をやった。正直、私は坐っているのがなにか飛び上がってしまったらしい。もう御霊に撃たれて全身が痺れてしまった。本当に坐っていられなくなったですよ、グワーツと来てしまつてね。いやあおつたまげた。こういうことがあるかと思つたね、正直。しかし、そのあとでもつて、まず何というかね、自然の色も、



色が変わってしまうんだよな。なにか光っている。私にかぎらず、もういろんな人が同じように。

なかには妙な霊に憑かれた人は泡をふいたり、いろんなことになる。いわゆる悪霊に憑かれて、ヘビだのキツネだのタヌキだのに。とてもそれは妙なものです。手島君が、

「聖名によりて命ず、出でよ！」

というわけだね。私もそんなことをやったこともありますけれども。昔はいろんなことが起きたです、正直。まあ今は、皆さんは魂の質がいいんでしょう。変なのは本当に聖霊の場に行くとおぼつ倒れる。ぶつ倒れるのには二通りある。グワーツと本当に御霊に撃たれるのと、御霊の作用によって他のものが苦しんで倒れて、苦悶するのといろいろありますが。しかし、なにも恐いことはない。キリストの霊は最も強いし、また救う霊ですから。それによって按手をして出すことができる。

とにかく、聖霊がくれば必ずその人に、その人らしい何か現象が起きる。諸々の現象はそれぞれでいい。なんだかしらんけれども、はつきりとこれは聖霊を受けたということが体験されます。夏の特別集会あたりではよくそれが起きる。特別集会で引っくり返った人が、回心した人が多いわけです。今日は最後の祈禱会が大事ですけれども、祈禱会の前段階として私たちは御言を深く受けとっておかなくてはならないわけです。

●聞こえざる御霊の風

それで、あなた方はこの

「烈しき風の吹ききたるごとき響き」

云々というところを読んで、

「さあ、そんな響きはあるだろうか？」

ではダメですよ。霊の耳でそういう響きを今、現に聴くようなところに入っていないかなくては。ということは、さつきから申し上げているように、本当にキリストの十字架を受けとってくださいよ。

少し目をつぶってください。こうやって沈黙で、今言った十字架の贖いを冥想して祈りの中に入ると、そうするとウワーツと迫ってくるものがあるはず。それが聞こえざる風なんです、天来の霊の風なんです。キリストが私たちの中に霊をもつて臨みきたりたもうところのことを、沈黙の祈りでもつていくらでも体験できる。

ただ大きな声で祈ることが祈りではない。ただ座禅を組んで澄ましていることがなにか積極的な内容でもない。沈黙の雄叫び、沈黙の投げ入れ、ウワーツと上からキリストの霊が臨んでくる。御霊の風というならば、この「烈しき風の吹ききたるごとき響き」というのを私たちの霊の耳でもつて聴くことができる。

ベートーベンあたりが作曲するとき――どうなんですか、彼は耳がなにも聞こえない



——霊の耳で聞いている。だから、素晴らしい交響楽が書けるんです。あれがいちいち音がしなければ書けないのではどうにもならない。ヘタな演奏会を聞くよりも、黙って譜面を見ている方がもっと凄いいことになる。絵描きなら、真っ白な紙を見ていて、その真っ白な紙にもう自分の描こうとしているものがグーッとそこに現象している。そうして、やりきれないで、それに引かれて描くようになる。私は本当の絵はそうだと思う。

何でも、この霊の世界は現実になつてしまう。

「御国をきたらせたまえ」

というのは、御国は来てしまつています、こつちへ。

聖書はどんなに呻き、叫び、響きを発しているか。この文字の奥を自在に受けとるような魂にならなくては。それを根源現象という。ただ現象を追うことはダメです。それはいわゆる徴の信仰になる。一番根源の現象を追っていれば、今度はそこから自在に神さまはやつてくださる。

いいですか。病気にかかったら——大いに按手も結構です、しかし——キリストに按手されていると思つて祈つてください。

「小池先生の按手によらなければ」

なんて、そんなことはなにもない。

「キリストさま、あなたの霊の御手を」

と、合掌するときに片一方の手で——こつちの方にはキリストの手が来たと思つて——祈ると、ビーツと響いてくるよ。いいですか、とにかくもう何とも言えないですよ、これは豊かで。

さつきから言っているでしょ。また、聖書にも書いてある。

「見ずして信する者はさいわいなり」

というのは、「見ずして信する」という言葉の本当の奥は、本当は見えるんです。霊的に見えるんです。ということは、なにか私は神秘的現象のことを言っているのではない。「キリストさま」と呼べば、具体的にキリストが今ここにきたり給うという事態を…（異言）…そういうことで行くんです。

●私と一体一如だ

それで、

「³また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人のうえに止まる。」

と。どうだっていいよ、「舌」であろうと何であろうと。その時は本当にそういうように見ええたんでしょう。霊火です。

「私の魂はあなたのその光、あなたの熱でなければ生きられないいきません」

という、それが「火」ですよ。霊即火。あるときは、水。



「水のごとく、泉のごとく湧きいでる」という。

天は空。地水火風というね、仏教の方でも。ウパニシャットにも書いてある。人間の頭は天。足は地。天地につながっているから。火は目。風は鼻。水は体そのもの。人間の身体が「地水火風空」ということになっている。みなこれは霊的な構造になっている。地は一切を担ってしまう。さっきの水分だから。もともと私たちは霊的な構造になっている。地は一切を担ってしまう。さっきのクリストフォロスみたいに。何でも受け入れてしまう。人間の身体そのものをこうやって冥想しても、いかに神の凄い創造体であるかということ。もうやりきれんですよ。それを全部、キリストが神のものと、

「汝はわがものなり」

と言う。「わがもの」というのは、「私につらなっている存在」ということです。ただ所有しているというのではない。

「私と一体だ、一体一如だ」

ということ。

「お前を贖ったから、お前は私と一体一如だ。空気を吸っているように、全存在は私の霊に包まれ、私の霊を吸っているではないか」

と。そのような現実は何をもつて体験できるかというと、まさに祈りなんです。

「祈りとはキリストと一如になること」

一如になることが祈りのなかみです。そして、キリストのころ、キリストの知恵――さっきのイザヤ書11章みたい――力が全部出てくる。

私がいかなんかものを読んで、それをダントであらうと何であろうと、全部私は消化してしまうでしょ。私がいかなんかものでも何でもない。キリストの知恵とキリストの霊が、キリストの光がみんなそうさせてくださるからです。私がそういうのを書くとき、

「あれはクリスチャンだから、あれの書いているのはなにか色がついている」

なんて、冗談ではないよ。一番色がついてないんだ。一般のドイツ文学者にはわからない。自然科学の方の人なら、そちらの方でいくらでも創造的なものが展開していく。身体の世界でも、医学の祖であるヒポクラテスが何と言ったかということ、

「自然の力にたよれ。薬ではない。自然の力で治るよに人間はできている」

と言った。それでこのごろやと、草根木皮に気がついたりなんかしている。昔から東洋の方が見当がよかった。毒草が今度は逆に薬草になってしまう。銀杏いちょうの葉も薬になる。神さまの造ったものにはひとつも無駄がない。御霊がくると、そういったものをみんななどのようにして使うか、知恵が出てくる。聖霊の世界はなんとも自由自在な素晴らしいことであるか。神の霊の無限無量な内容です。

ここでもそうでしょ。



「⁴彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。」

と。地方の言葉を知らないペテロが、ヨハネが語ったと書いてある。みんなびっくりしてしまった。どうして私たちの地方の言葉を知っているのだろうか。サンダーシングがそういうことをした。英語を知らなかったけれども、祈っているうちに英語が出てきてしゃべったという。これは普通の常識ではわからんです、御霊の世界の神のわざというのは。本当の神のわざだから。

そのためには、本当にキリストの中に祈りこんでください。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、福音書のキリスト。この福音書のキリストの中に本当に祈りこんでいく。福音書を読むときは、このキリストという姿を、自在なこのキリストの姿というものを、観念ではなく、全存在的にこれを受けとっていかなくてはいかん。そうすると、福音書を読んでい——使徒行伝でなくてもいい。使徒行伝は使徒たちがやった。福音書はキリストがやったところなんだから、これは使徒行伝以上の世界なんだ——そのキリストの中に、読むことにおいてその中に入ってしまう。キリストの言葉に聞き入り、捕まえられ、動かされ、すっ飛ばされる。そうしたら楽しくてしょうがない。

「さいわいなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

と。霊が貧しくされたではないですか、十字架で。そうしたら、天国、キリストという天国が、私の中に入ってきたではないですか。みんな御霊の事態ですよ。

みんな何か難しいことにしているんだ、聖霊と言うと。あなた方は私の話を聞きながら全的に自分を投げ込んでいますか。そうしたらもう異言が迸るくらいな聞き方にならないとね。

「¹⁶これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。¹⁷「神いい給わく、末の

世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若

者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。¹⁸その世に至りて、わが僕・

婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。¹⁹われ上は天に不思議を、下

は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の氣とあるべし。」(使徒行伝2・16～19)

と。終末的なことです。今にそういう時がくるぞと。どのような現実になっても、そのときこそ逆に本当に御霊の力を現すためには、日々の生活においてこのキリストと一つになつていくということが何といつても肝心なことです。いたるところこれ祈り場です。

「南無キリスト」

の一言です。

●我が衷なるキリスト

内村先生がいつも『聖書之研究』の第一頁に英語の短文を書いて、それから日本語であとから書いている。「クライスト ウィズイン ミー」「我が衷なるキリスト」という短文



(1921年9月10日254号) に先生はこう書いている。

「我が衷に宿り給ふキリストは聖霊御自身以外の者ではない、

内村先生ははっきり言っているんだ。

キリストは今天に在し、父の右に坐し給ふといえども、我をして地上に在りて孤児として存し給はず、彼は聖霊を以て我が衷に宿り給ふ、

一人びとりにキリストは全的に宿りたもう。

而して我を導き、我を教へ、我を慰め給ふこと彼が肉を受けて地上に在りて其弟子等と共に在し給ひし時に異ならない、

いや、実はそれ以上です。

クリスチャンの強きは彼に無比の信仰有るからでない、詩人テニソンの謂ゆる「不朽の愛なる強き神の子」が彼の衷に宿り

「強き神の子、朽ちぬ愛よ」という有名な言葉が「イン・メモリアム」の最初に出てくる言葉です。

彼を通して働き給ふからである、我は我を愛する者に由り勝ち得て余りあると云ふのはローマ書8章の言葉です。

我と共に在し給ふ聖霊に由りて然かあるを得るのである、聖霊は現在の事実である、聖霊に由りて基督教は単に過去又は未来の事にあらずして、現在目下の事となるのである、

全くそのとおりです。それは永遠の今です。永遠の現在、終末的現在です。

『イエス答へて曰ひけるは若し人我を愛せば我言を守らん、且我父は之を愛せん、我等(父と子)臨りて彼と偕に住むべし』とあるは此事である。(ヨハネ伝14章23節)

まあ、この引用はあまり強くないですけども。要するに、内村先生も「内なるキリスト」ということをあるときこうやって書いていらつしやる。「クライスト ウイズイン ミー」は、

「ホーリスピリッツ ウイズイン ミー」「聖霊わがうちに」

と同じことだと。まあ正直、聖霊がうちになれば、力がないことは事実が証明するから仕方がないよ。

牧師さんたちが聖書の勉強を一生懸命にして説教はするよ。なにも牧師の悪口を言っているわけではないけれども、「について」語っているうちは、いくらそれが正しいことを語っても、響かない。「の中から」ものを言わないと。御霊の中から告白しなければ、人の魂に響かない。「について」あまり言われるとくたびれてしまうよ、聞いている方が。中からものを言われていると、知らないまにだんだん聞いていても力が出てきてしまう。語っていても力が出てきてしまう。

先生がねらっていたことはそういうことであつた。祈りについても内村先生はこう言っている。



「私は自分自身で祈りません。私は神さまに、私に代わって祈っていただきます。面白いことを言っているよ。」

霊なる神さまが私の内に宿りたまいて、私を通して神さまの聖意を祈り求むる事、時には言いがたき嘆きをもって、それが本当の祈りであります。哲学的には不可解であります。しかし実験的には真理であります。この神さまが、その子供の内にありて、彼らを通して神さまに祈りたもうというは、それはまことに私の祈りであります。なぜなれば、私が神さまに祈っていたくのであるからであります。そしてその祈りの内容が、私の欲や望みでなくして、神さまの聖き聖意であるがゆえに、必ずその聖前に受けられて、きっと聞かるるのであります。自己を無きものとすることは、祈願をもって神にもの言う時にすら必要であります。私どもは神さまに、神さまが私どもに代わって祈ってくださいるように祈らなければなりません。」(1923年12月『聖書之研究』)

「時にすら、」ではない、本当にその「時にこそ、」必要なんです。神さまに祈ってもらおうというのは、御霊の本願の祈りであるということ。内村先生というのはとにかく角度のいい人です、グッグツと。それで火花を散らしているんだ。それをあとの人たちが常燃の火にしなければダメだ。無教会が――内村先生が「聖書の研究」と言って、「研究」なんて言うものだから――今度は「研究」にこだわってしまったって、学問キリスト教になってしまった。世界的な学者はいるよ。それは悪くはないさ、結構です。けれども、使徒たちが、

「今のキリスト教は、研究的な、についてのなものばかりで、中からの本当に響きを発するものが少ない」と嘆いているかもしれない。

皆さんは、どうぞ、御言の中に自分を入れて、ギリシア語やヘブライ語ではない、その奥の、本当の奥の言葉、神の根源語の中に自分を入れて、グーッとこの聖霊の響きを受けとって、

「なるほど、『わが言は霊なり生命なり』ということが身にしみます。爆発します」という読み方をしてください。

ブルンナーという人が、『聖霊のわざについて』という本を書いているが、彼は本当にこのことに気がついていて。ことに『教会の誤解』という本には、

「教会はもともと建物でも信仰制度でも何でもない。聖霊の宿ってないような教会は絶対に教会でない」

ということをはっきり書いています。ブルンナーさんはそんなことを言うものだから、一般の教会では彼のものはあまり歓迎しない。冗談ではないよ。ブルンナーにしろ、バルトにしろ、終りにはみんな聖霊のことに気がついていて。

どうぞ、そういうことで、やれカトリックの、プロテスタントの、教会の、無教会ののではない。使徒たちと同じ次元になることです。おわります。

